

阿部 秀夫（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

中級後半から上級の学生を対象としており、1 週間に 1 コマ (90 分) の講義である。履修学生数は 15 名で、日本文化についての理解を深めることが目標である。取り扱うテーマで前半と後半に分け、後半に京都へのフィールドトリップを実施した。後半のテーマは食文化（「飲」も含めた）について、前半は食文化以外の点について、映画視聴を通じて学習した。なお、前半・後半のテーマの範囲内で前半 1 本、後半 1 本のレポート提出を課した。

2. 授業内容

学期前半は「みんなの家」「ダーリンは外国人」の 2 本の日本映画を用いて、そこに現れる日本文化、外国人から見た日本文化を意識させた。前者の映画でとりあげたのは家の構造、家族の形、伝統的行事（地鎮祭）、注連縄などである。後者の映画では、外国人の日本での異文化接触や国際結婚の問題、結婚式の服装と着物を取りあげた。

学期後半はフィールドトリップに絡め、京都を意識しながら「飲」を含めた食文化に関わる学習を行った。とりあげたのは、水の硬度と料理、出汁、豆腐、酒造り、納豆・漬物などの発酵食品、京都と琵琶湖疏水と近代化、そして和菓子である。

食文化学習の一環として、現代日本文化 1 クラスと合同でフィールドトリップを実施した。教員 2 名と日本人学生 6 名で学生 55 名をグループに分けて引率した。見学先は京都のデパ地下、錦市場、伏見稲荷であり、最後に七条での和菓子づくり体験を行った。なお、指定の場所での写真撮影という簡単なタスクを課した。

3. 成果と今後の課題

学生の評価は全員が「よかった」であったが、改善点として、調査やディスカッションの時間がもっとあったほうが良いという建設的な意見があった。映画はもっとおもしろいものをとという意見もあった。動画やサイトの資料を見せながら授業を進めたために視聴するだけの時間が多くなっていた点は今後の課題である。フィールドトリップのグループでの行動は教育的にも、周りの方々への迷惑軽減の意味でもよかったと言える。学生からの声にもあったが、伏見稲荷での時間が短かった。天候に左右はされるが、全体のスケジュールを見直す必要もあるのではないかと感じた。